佐原　プロジェクト
Sawara Project

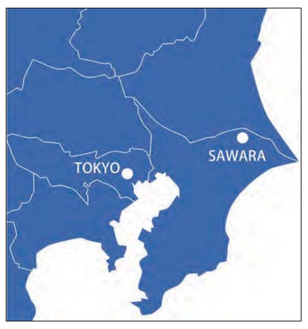
Urban Design Lab Projects 2014
01

多主体がまちと関わり続ける場づくり
高校生の参画と空き家活用

Associate prof. Aya KUBOTA
Research Associate Eunjin KIM
Nobuyuki Takizawa(M2)
Misa Lee(M2)
Takane Imagawa(M2)
Keisuke Otsuru(M2)
Nanami Nakamura(M2)

佐原プロジェクトの取り組み

観光地として注目される佐原



千葉県香取市佐原は「北総の小江戸」と呼ばれ、江戸期に利根川水運とともに商業の町として栄えた。1996年に関東初の重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）に指定された歴史的町並みや、佐原の大祭（重要無形民俗文化財）を目当てに多くの観光客が訪れる観光地となっている。

高校生の参画

まちづくり団体の高齢化等の課題から、「回遊性の向上」というテーマに加えてまちの新たな担い手探しが重要であると考え、地域の高校生にアプローチした。そして、佐原まちづくりプロジェクト(SMP)という高校生有志のチームが結成され、共同してまちづくりをしていくことになった。

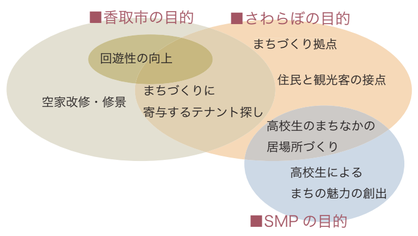
空き家活用実験「さわらぼ」

空き家である旧飯田家を「さわらぼ」と名付け、高校生と共にこの場所を使っていくことにした。旧飯田家は観光客と地元の方と高校生の生活・行動範囲が重なる「際」に位置しており、多様な出会いを生んできた。

さわらぼの具体的な活用

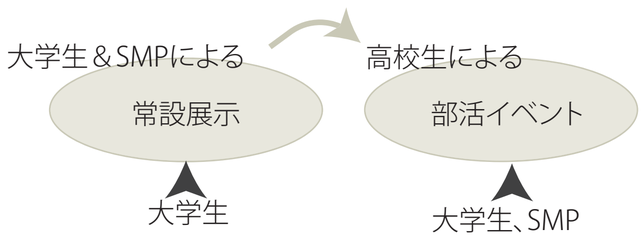
当初の方針

さわらぼの活用方針は3つあった。
①：高校生のまちなかの居場所
②：佐原のまちづくりの拠点
③：観光客と住民の接点



活用の主体の変化

当初、常設展示や建物案内などが主な活用だったが、だんだんとSMPや部活動など高校生主催のイベント活用に切り替わっていった。



▲常設展示
記憶アーカイブ(上)では住民と観光客の接点を、だれでも写真展(下)は深みのある観光、回遊性の向上を目的に実施した。

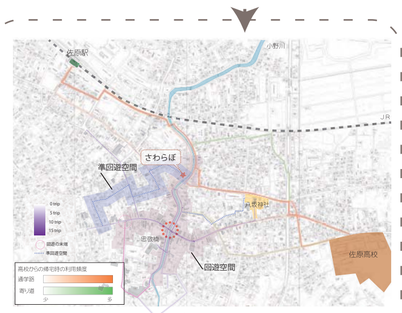
▲部活利用
演劇部公演(上)は伝統的建造物ならではの工夫があった。将棋部(下)は週一階ここで活動し、まちの人と対局した。

▲高校OBOGが参加
さわらぼのこれからを考えるワークショップ(上)とSMPによる一年の報告会等(下)を開催し、OBOGが参加した。

さわらぼから見えてきたこと

高校生主体のまちづくり

高校生が主体となって空き家活用をすることで多くの人に助けられながら活動することができた。また、①高校生と外の人との交流のきっかけ②進路への影響③自主的な課題の発見④佐原というまちに関する興味、愛着の面で変化がみられた。



※さわらぼの立地
観光客の回遊空間と、準回遊空間、そして高校と駅の通学路の際にある。

縁を持つ人とまちとの接点

観光客が何度もさわらぼを訪れ活動を手伝ったり、近所の人や高校OBOGが顔を出す等、広く縁を持つ人に対してまちとの接点を創出し、観光客や住民以外の人がまちと関わり続ける可能性を見出した。

これからのさわらぼを考える

さわらぼが持続する方法と仕組み

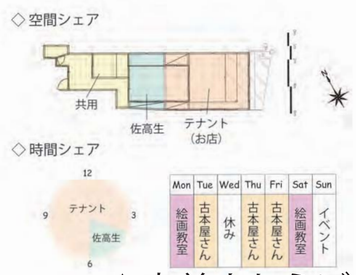
移動さわらぼ

さわらぼの場所自体が移動していくという考え方。場所は、テナントがまだ入っていない空き家で、テナントが入ったらまた次の場所に移動する。

定着さわらぼ

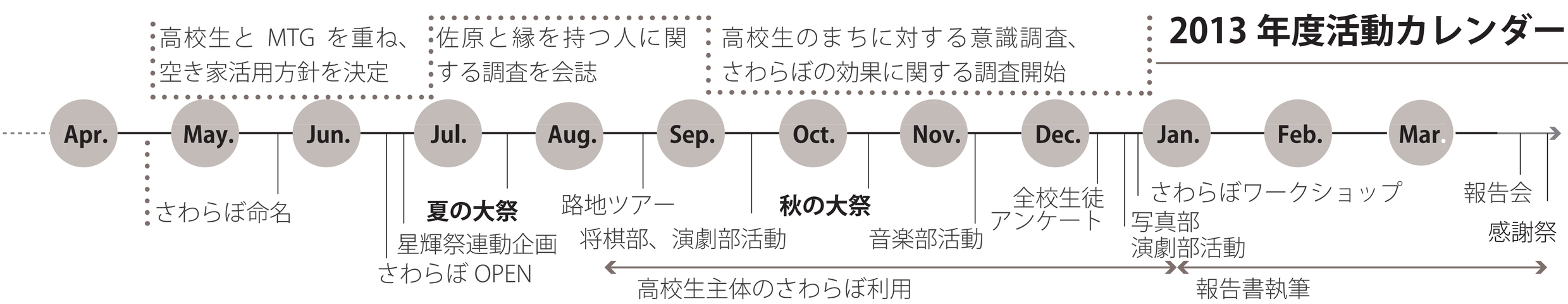
一つの建物でさわらぼを続けていく考え方。その実現の形として、一つの建物を空間・時間でテナントと共有するテナントシェアリングを提案した。

▲移動さわらぼ



▲定着さわらぼ

ぷらっとほーむ

佐原と縁を持つ人々がさわらぼという場所を介して寄付やイベント参加、共同など色々な形で佐原と関わりを持ち続けられる仕組みを提案した。

2013 年度活動カレンダー